

日本水紀行 (7) 近畿地域の名水

島野安雄¹⁾・永井茂²⁾

1. はじめに

今回は、近畿地方の2府4県に位置する11ヶ所の名水を取り上げる。それらを名水番号順に挙げると、滋賀県が十王村の水(彦根市)と泉神社湧水(伊吹町)の2ヶ所、京都府が伏見の御香水(京都市)と磯清水(宮津市)の2ヶ所、大阪府が離宮の水(島本町)の1ヶ所、兵庫県が宮水(西宮市)・布引溪流(神戸市)・千種川(県西南部)の3ヶ所、奈良県が洞川湧水群(天川村)の1ヶ所、そして和歌山県が野中の清水(中辺路町)・紀三井寺の三井水(和歌山市)の2ヶ所である。

これらの名水については、1989年から1993年にかけて現地を訪れ、採水調査を行った。この際に見聞きした事柄および各市町村パンフレットなどの資料をもとに紹介する。

2. 近畿地域の11名水等の現況

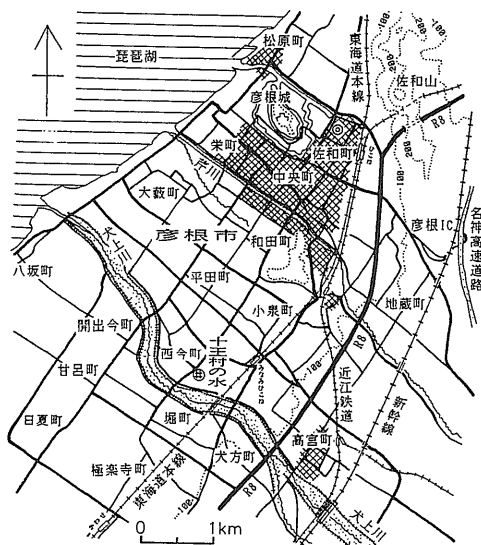
2.1 十王村の水

琵琶湖東岸の滋賀県彦根市南部に位置する「十王村の水」は、古くから湖東三名水(他に米原町の醒ヶ井の水、五ヶ荘町の清水ヶ鼻の水)の一つとして知られた湧水である。十王村の水の「十王村」とは、この付近の古名で、昔この地に「二十王堂」と呼ばれたお堂があり、後に織田信長の時代に焼失してしましたが、地名として「二十堂」の名が残り、それがなまって「十王」と呼ばれるようになったと伝えられている。

十王村の水は、JR 東海道本線の南彦根駅西側の西今町の一角に位置している(第1図)。この西今町の南側を、鈴鹿山脈の山中に源を発して琵琶湖に注ぐ犬上川が北西方向に流れ下っている。犬上川の

上流部は、中・古生界や白亜紀の湖東流紋岩類からなる山地で構成されている(中沢ほか, 1987)。平地部に出た犬上川は、名神高速道路より西側一帯では扇状地性の沖積低地を形成しており、国道8号線付近までの区間では河川水が伏流して水無川となっている。

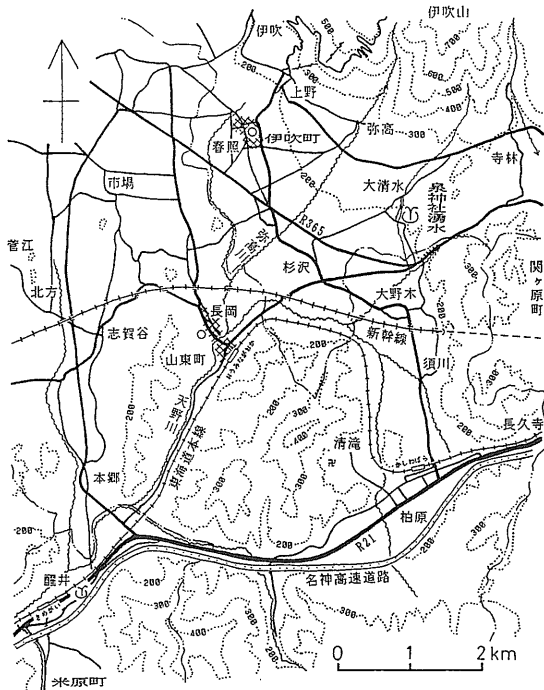
十王村の水の水源は、彦根市街地から川瀬へ通じる道路が犬上川を渡る手前の西今町の交差点の所であり、交差点の四つ角の一つである正方形をした一角を切り取った変形の五角形の石の柵で囲まれた面積20 m²ほどの湧水池からなる。池の中では、石の井桁で囲まれた部分やその周辺の砂礫の間から清水が湧き出してきている。水温は15°Cほどであるが、電気伝導度は284 μS/cm とかなり高めであった。この清水は近くを流れる犬上川の伏流水であり、湧水池からの湧出量は現在日量約20 m³ とそれほど多くはないが、かつては飲み水や産業用にも利



第1図 十王村の水

1) 宇都宮文星短期大学文化学科：
〒320 宇都宮市上戸祭4-8-15
2) 元所員

キーワード：名水百選、湧水、河川、水文環境、近畿地域



第2図 泉神社湧水

用されたという。近年は、湧出量も少なくなり、汚れも目についてきたというが、この湧水池から流れ出た水は十王川という長さ1 kmほどの小さな川となって集落内を流れ、やがては犬上川に合流し、琵琶湖へと注ぎ込んでいる。

なお、水源である湧水池の中央部には、お地藏さまを祭った六角形の小さな石造りのお堂がある。このお地藏さまは、産婦の乳の出ない時はお願いするとたちまち乳を授かり、不用になりお預けにいけば乳が止まるとされ、“母乳の地藏尊”として地域の人々に信仰されている。毎夏には、神霊を慰め、子供達の健やかな成長を願って、地藏盆の祭礼が盛大に営まれている。

2.2 泉神社湧水

泉神社湧水は、滋賀県北東部の坂田郡伊吹町大清水地区内に湧き出している清水である(第2図)。この大清水地区は、古来より歌枕としてよく詠まれ知られている伊吹山(1,377 m)の南側に位置していて、その南麓に広がる扇状地と丘陵地との境の部分に集落が形成されている。伊吹山自体は古生代の石灰岩の大規模岩体から構成されていて(中沢ほか, 1987)、現在も各所でセメント原料あるいは骨材として採掘されており、山体の変貌でも有名な山であ



写真1 泉神社湧水

る。

ところで、地名の“大清水”の名の由来としては『大化の改新を行った天智天皇がこの地一帯を弓馬練練場と定め、人々が住居を構えた際に、湧き水が出て川を形成した』とあり、「天泉所」と呼ばれていたが、やがて後には「大清水」と改名されたという。また、この水は日本武尊が伊吹山の神を討ち取りに出掛た際に病を治した水との伝説や小栗助重が病の平癒を祈願した命乞いの水としても知られている。そして、この泉神社湧水は伊吹山の西麓にある「桶水」・「ケカチの水」とともに伊吹の三名水の一つに数えられている。

湧水のある泉神社は大清水集落の東、丘陵地西端のやや高い所に位置している。泉神社の湧水は石段の登り口右側奥にあり、山裾の岩の割れ目から清冽な水が勢いよく流れ出している(写真1)。湧き口の上には注連縄も張られていて、また側には水神様が祭られている。湧き出した清水を樋で導いた水場があり、そこで人々が汲めるようになっている。水温は13℃ほどと冷たく、pHは7.4と弱アルカリ性である。電気伝導度は212 μS/cmとかなり高いが、これは石灰岩地域の水の特徴的なCa⁺⁺とHCO₃⁻成分を反映している。湧出量は日量約4,500 m³と見積られている。この大清水地区は扇状地性の土地柄のため、全般に地下水が深く、水の便の悪い所であり、唯一の水源が泉神社湧水であって、つい10年前頃までは地区の人々の貴重な飲料水として利用されていたという。各戸に町営の水道が完備した現在は、もっぱら灌漑用水に用いられているとのことであるが、昨今は県内や近隣の府県の人々が多く水を汲みに訪れている。

なお、第2図の南西端に位置する米原町の醒井さめがいにもいくつかの清らかな湧き水が出ている。醒井は古くから東山道や中山道の宿場町として栄えた所で、居醒いざめの水・十王水・西行水などの名称のついた湧水があり、かつての湖東三名水の一つでもある。これら湧水は名神高速道路と国道21号線との間の旧中山道沿いにおいて、居醒の水は日本武尊に関する湧水、また西行水は西行法師に関する湧水というように故事来歴のある湧水である。この居醒の水は水温13℃ほどで、水質的には泉神社湧水と同様な性状を呈している。これらの湧水を集めた地藏川は、旧中山道の通りに沿って醒井宿の中を西に流れ、やがて天野川へと注いでいる。この地藏川は水のきれいなこともあり、ハリヨ(トゲウオ)が生息している。

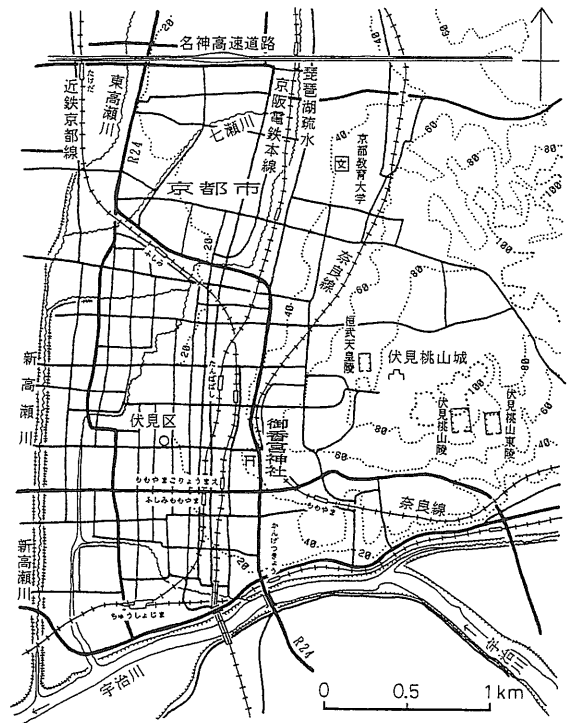
2.3 伏見の御香水

今年、平安京造営千二百年祭を迎える京都では、清らかで豊かな井戸水や湧水によって、食の文化をはじめとする数々の伝統的な文化が育てられてきた。そのため古都・京都には、昔から「三名水」とか、「七名水」と呼ばれたものが多くあったという。例えば、京都御所内にある祐井・鼎井・染井が「御所三名水」、祐井の代わりに醒井を入れた「京都三名水」や、「都の七名水」・「伏見の七名水」・「宇治の七名水」などと呼ばれるものもあったとされる。

名水百選に選ばれた「伏見の御香水」は、京都市伏見区の御香宮の境内にある(第3図)。この場所は現在伏見桃山城の建っている丘陵地と鴨川の沖積低地との間の中位段丘面上に位置している(中沢ほか, 1987)。御香水は拝殿のすぐ左横にあり、竹製の二つの樋からポンプで汲み上げられた地下水が出ており、水が汲めるようになっている。水温は約19℃とやや高めで、pH6.4と弱酸性の水である。

この「御香宮」のいわれについては、元々は御諸神社と呼ばれていたが、境内に良い香のする水が湧き出ている、それを飲むとどんな病気でもたちまちに治るとの評判が高くなったので、御諸の「御」とよい香の「香」の字を取って、「御香宮」と呼ぶようになったとされている。

ところで、この伏見には、豊臣秀吉が伏見城を築く前に、岩井(石井とも書く)・春日井・常磐井・白菊井・苔清水・竹中清水・田中清水という「伏見七名水」があり、御香水はその中の一つ岩井であると



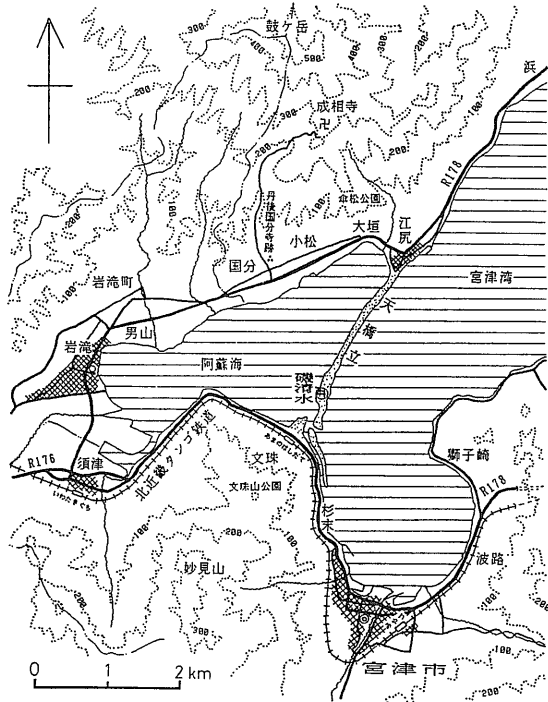
第3図 伏見の御香水

されている。これらの名水のほとんどは埋め立てられたりして、現在飲用できるのは岩井の御香水のみである。しかしながら、かつての岩井は伏見城築城の際に埋め立てられてしまったという。その後、御香宮の境内に掘られた井戸の水が利用されてきたが、現在あるのは1982年に新たに深さ150mのボーリングによって掘り当てた深井戸の水である。

なお、この伏見の地は明治以前には「伏水」とも書かれ、至る所から良質の水が湧き出し、「伏見の酒」として酒造産業の繁栄の土台になった所でもある。現在でも、辺り一帯には造り酒屋の倉が建ち並び、酒所としての風景がみられる。

2.4 磯清水

京都府の北西部、丹後半島の付け根に位置する宮津市にあるのが「磯清水」である。この磯清水は宮津湾の中であって、古来より「安芸の宮島(厳島)」・「陸前の松島」と並ぶ日本三景の一つに数えられている「天の橋立」の部分にある(第4図)。天の橋立とは、宮津湾内を反時計回りに流れる沿岸流によって、花崗岩類の山地から運ばれてきた白い砂礫が堆積したもので、海を内と外とに二分して長く延びた砂州である。この地形は、北の江尻から南の文



第4図 磯清水

珠地区へ砂嘴状に延びてきたものであり、宮津湾を隔てて阿蘇海を囲って、全長が約3.6 km、幅が20~170 mである。南端部では、わずかに海が開けていて宮津湾と阿蘇海とを通じている。この砂州には八千本余りの松並木が茂っていることから、海に映える白砂青松は見る位置によりそれぞれに趣のある景観を示している。特に、この天の橋立では、傘松公園・成相寺あるいは文珠山公園などをはじめとする地点からの“股のぞき”が有名である。

この「天の橋立」の南端に近い砂州の幅がやや広くなった部分に、磯清水をはじめとして橋立神社や蕪村の碑などの建造物がある。これらは文珠地区からは回旋橋として知られる小天橋および大天橋(日の出橋)を渡り、松原を10分程歩くと行き着く。磯清水は一辺が1 mほどの四角形をした木製の井枠からなる浅井戸で(写真2)、井戸枠の上部から水面までは約2 mほどの深さである。井戸上の小屋の梁には滑車が付けられていて、釣瓶で水が汲めるようになっている。水温はおよそ19°Cとやや高めであり、pHは6.2と弱酸性で、電気伝導度が170 $\mu\text{S}/\text{cm}$ と中庸の値を示していて、水質的には Ca^{++} と HCO_3^- 成分が主体である。すなわち、周

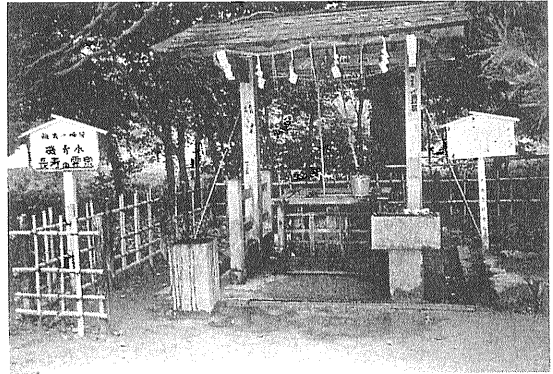


写真2 磯清水

囲が海であるのに、井戸には全く塩分のない真水が湧き出ており、不可思議な水として、古来より“長寿の霊泉”としても知られている。なお、この磯清水は平安の昔から歌や詩に讃えられており、女流歌人・和泉式部が「橋立の松の下なる 磯清水 都なりせば 君も汲ままし」と都の友に詠み送った歌は有名である。

ところで、真水と海水との関連については、「ガイゼン-ヘルツベルクの公式」という地下水の境界についての関係が成立している。これは両者の比重の差から、真水が海水準より少しでも高い位置にあれば、その高さの約42倍の深さまでは真水の状態であるというものである。天の橋立の砂州の部分でも、この関係が成り立っていることを物語っている。

2.5 離宮の水

大阪府の北東端、京都府との境に位置している島本町に「離宮の水」がある。島本町は京都盆地から大阪平野への出口にあり、この地はかつての古戦場として知られる天王山と石清水八幡宮のある男山とに挟まれた地峡部でもある(第5図)。ここでは丹波山地に発して京都盆地を流れ出た桂川、琵琶湖に発した宇治川、布引山地などに発して笠置山地を横切って流れてきた木津川の三川が合流し、近畿地方での大河である淀川と名前を替えて流れ下っている。離宮の水とは、淀川に合流する水無瀬川の右岸に位置している水無瀬神宮の境内にある井戸水のことである。

水無瀬川が淀川に注ぐこの辺りは水無瀬の地と呼ばれ、水無瀬川によって形成された扇状地であり、表流水は地下に潜って伏流水となり、河道は文字ど

おりの水無川になっている。この水無瀬の地は、京都に近く風光明媚な土地柄のため、古くから平安貴族らの別荘地になっていた。特に、後鳥羽上皇が造営した水無瀬離宮は有名で、この地をこよなく愛された上皇は「見わたせば 山もとかすむ 水無瀬川 ゆふべは秋と なにおもひけむ」という歌を詠まれている。しかしながら、承久の変(1221年)により、上皇は隠岐の島に配流され、かの地で「水無瀬川 わが古さとは 荒れるらむ まがきは野らと 人もかよはで」と詠まれ、水無瀬をしきりに偲ばれたという。この水無瀬離宮跡に、後鳥羽・土御門・順徳の三上皇を合祀して建てられたのが水無瀬神宮である。

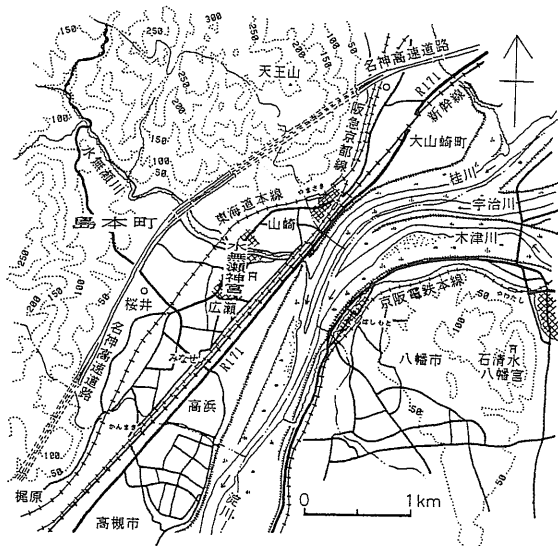
水無瀬川の上・中流域の山地は、中生界の丹波層群の砂岩・粘板岩などからなり、下流部の丘陵地の一部は鮮新～更新統の大阪層群によって構成されている(鶴巻ほか, 1992)。そして、水無瀬川が山地から平地に出た所には扇状地性の砂礫層が堆積し、その先には淀川などによる氾濫原堆積物が分布している。離宮の水のある水無瀬神宮は扇状地の扇端部に位置し、井戸はその砂礫層に掘られた深さ10 m余りの浅井戸である。ポンプで汲み上げられた水を採水したこともあって、採水時の水温は約22°Cと高い値を示していた。そして、pHは5.8と弱酸性を示し、電気伝導度は244 $\mu\text{S}/\text{cm}$ とかなり高い値である。

この水無瀬神宮の地下水は、御影堂の昔から神饌のみに用いる神聖な水として使われてきたが、茶道の始まりとともに茶の湯の水として、また現在も茶道や書道などの水として用いられている。ところで、人口約3万人の島本町では、上水道水源をすべて深井戸の地下水によってまかなっていて、住民の水に対する関心の度合の高い地域である。

2.6 宮水

西宮市南部の海岸部の地下に湧く「宮水」は、古くから“灘の酒”の仕込水として名高い水である。宮水については済川(1989)の詳しい報文があり、これを一部参照して述べる。

この西宮の地で酒造りが始まったのは、今から約500年前の室町時代中期とされる。その後、しだいに酒造業者も増え、江戸時代中期には西宮の今津から神戸の御影付近にかけて酒蔵が建ち並び、今津港などは各地へ酒を運ぶ船でにぎわったという。これ



第5図 離宮の水

がいわゆる“灘五郎”の始まりとされる。灘五郎とは、今津・西宮・魚崎・御影・西郷という西宮市から神戸市東部にかけての海岸部一帯の地域を指している。この地域には現在50余りの酒造会社があり、全国の清酒の出荷量の約1/3を占めている。ところで、酒造用水として西宮の水の価値をみいだしたのは、江戸天保年間に酒造業を営んでいた山邑太佐衛門という人で、秘密の水として灘の酒造業者がこぞって西宮の水、すなわち“宮水”を使うことになり、酒造りの天与の霊水と呼ばれるようになった。

現在、宮水を汲み上げている浅井戸があるのは、国道43号線より南の鞍掛町・石在町・久保町のおよそ500 m四方の範囲の地域とされている(第6図)。この地域には約30ヶ所の井戸場があり、一つの井戸場には数本の井戸が掘られていることから、宮水井戸の総数は約80本とのことである。それぞれの宮水井戸は、直径が1.5~2.5 m、深さが4~5 mで、地下水水面は地面から2~3 mの所にあるという。この宮水そのものについては酒造用の水ということもあり、通常の地下水とは異なり、溶存成分がかなり多い特異な水質組成をしている。

この地域の地質状況をみると、上部は六甲山地に源を発する夙川や東川などによって運ばれた厚さ20~30 mの沖積層から成り、その下位には大阪層群の伊丹礫層や粘土層が続いている(済川, 1989)。地表面から深さ3~5 m位の所に礫混じりの粗砂の沖積層があり、これが宮水の帯水層になっている。

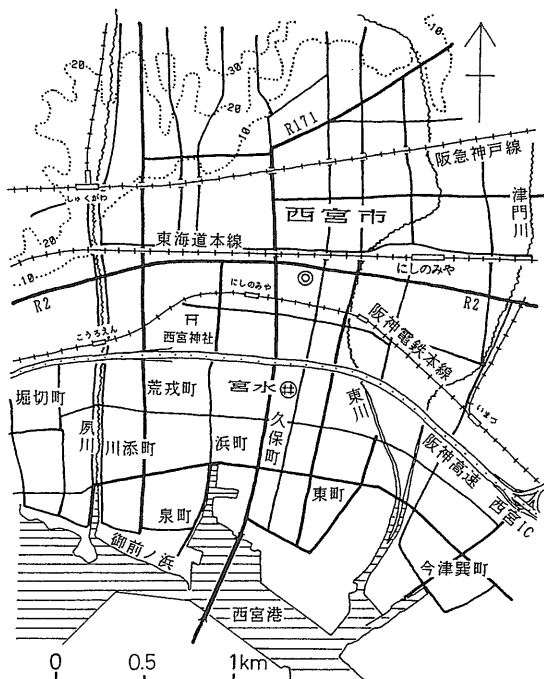
この帯水層の下位には、浅海性の貝化石を含む暗青灰色のシルト質細砂層がある。この細砂層は難透水層であり、さらに宮水にとっては有害な鉄分・有機物・アンモニアなどが多く含まれている。そのため、宮水井戸の掘削には、細砂層の攪乱を起こさないように一定の深さに止めているという。また、井戸の側面から汚水が入らないように、底付近からのみ地下水が流入するような取水構造になっている。

この宮水井戸の分布については、時代により変遷がある。初期のものは各地へ宮水を搬出するために便利のよい海岸部、今の西宮港の近くに集中していた。その後、宮水の揚水量の増加と明治末から大正初めにかけて行われた西宮港の改修工事のために、海水が井戸に侵入してきて塩水化し、使用不可能になったものも現れた。このため、酒造用井戸を北東方へ移したという。そして、昭和に入って宮水の使用は折からの不況で幾分減ったが、1934年に室戸台風による高潮の影響のため、塩分濃度が一時的に増加したので、さらに北方の地域に井戸が新設された。これが現在使用されている宮水井戸群である。第二次大戦後、経済活動の復興と共に宮水の使用量も増加していったため、1954年に、水量確保や水質保存を目的とした宮水保存調査会が結成され現在に至っている。そして、宮水の揚水量については、日量1,500 m³程度に制限を設けている。

ところで、この宮水は取水制限ということで管理され、一般市民が手軽に宮水に触れて親しめるというものではない。通常はあらかじめ西宮酒造会館に申し込み、その許可を得てから出向いて行き、会館の井戸で汲み上げられた宮水を味わえるということである。そして、宮水は酒造用の水には最適ということであるが、溶存成分が多く含まれていて、必ずしも飲料用にはあまり適していないようである。したがって、多くの人々が自由に訪れ、水を楽しんでいる他の多くの名水とは異なり、宮水は一般市民にとって何と不自由な、不可思議な名水でもある。

2.7 布引溪流

布引溪流とは、神戸市中央部を北から南に横切って流れる生田川の中流部を指す(第7図)。生田川は、六甲山地西部に源を発する全長10 kmほどの小河川で、摩耶山の北側を回って西から南に向かって流れ、途中では布引貯水池に水を溜めたりしている。そこから下流部が布引溪流と呼ばれる渓谷の部

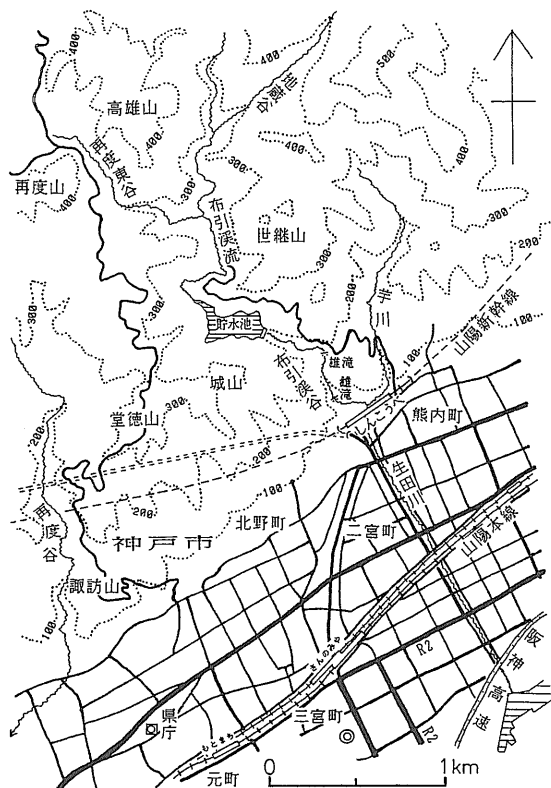


第6図 宮水

分で、いくつかの滝があり、急流となって流れ下る。やがて山地部からの出口にある山陽新幹線神戸駅の駅舎の下をくぐり抜けると、市街地の広がる緩傾斜地が開けているが、生田川はこの市街地を横切って一気に神戸港へと流れ下っている。

生田川上・中流域の山地部の地質は、布引花崗閃緑岩と呼ばれる六甲花崗岩から構成されている(藤田・笠間, 1983)。このため、そこから流れ出る河川水は電気伝導度が100 μS/cm前後で、Ca⁺⁺とHCO₃⁻成分を主体とする清澄な水である。

布引溪流は神戸市の中央区にあり、大都市である港神戸の繁華街からわずか車で数分の所に位置している。すなわち、この布引溪流は市街地から歩いて行ける近さにありながら、自然美が多く残されている所でもある。このような大都市の市街地に近接した自然景観は全国的にも稀な存在である。急峻な渓谷部には、雄滝・夫婦滝・鼓滝・雌滝などの数ヶ所の滝がある。このうち上流側に位置する雄滝は、この渓谷のシンボリックな存在で、「伊勢物語」にも登場する滝として知られる。滝の高さは40 m以上もあり、ナイフで削りそいだ荒々しい花崗岩の岩肌を流れ落ちる水流の様はみるからに華麗な美しさがある(写真3)。渓谷にはケヤキやカエデなどの広葉樹が



第7図 布引溪流

茂り、溪流には水生生物も豊かで、遊歩道も作られていて、市民のレクリエーションの場として四季を通じて親しまれている。なお、生田川は全流域が「市民の水辺」として、市より環境保全水域に指定されている。

ところで、近年、「六甲」という名称については、ボトルウォーターの「六甲のおいしい水」がすぐに浮かぶ。当初、筆者の一人は六甲山中から湧き出した清水と思っていた。それにしても Na^+ や Cl^- をはじめとして各々の溶存成分がかなり多いので、花崗岩類からなる六甲山からの水としては水質的に不思議なことと思っていた。しかしながら最近になって、この水は神戸市灘区内にある深井戸から汲み上げた地下水であるとのことがわかり、水質上の疑問が解明したという経緯がある。ネーミングから受けるイメージには、かなり大きな効果があるように感じられる一件であった。

2.8 千種川

千種川は、兵庫県の南西部を北から南に流れ、播磨灘に注ぎ込む全長約80 km ほどの中規模河川で

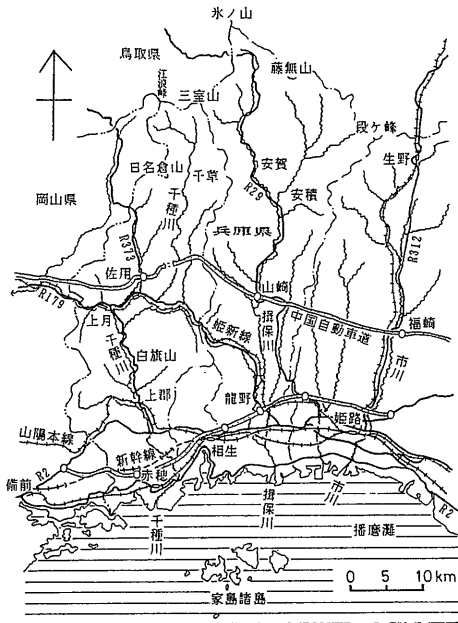


写真3 布引溪流の雄滝

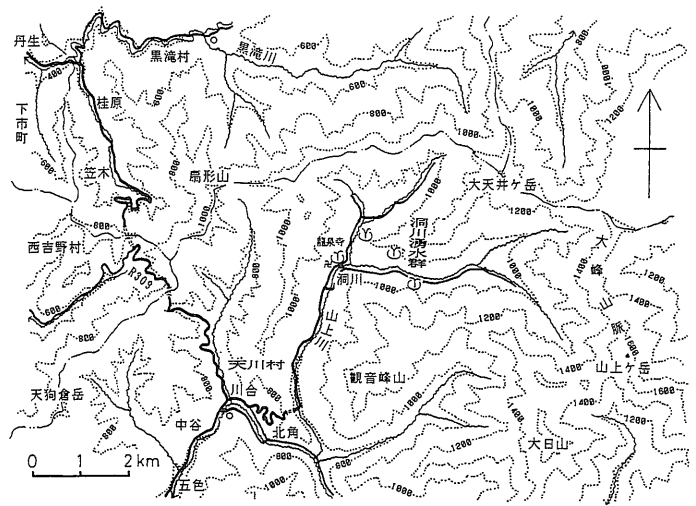
ある(第8図)。この川の水源は、氷ノ山・後山・那岐山国定公園に指定されている山地部で、千種町北部の兵庫・岡山・鳥取三県の県境になっている江浪峠付近(標高約1,150 m)にある。千種町・南光町を流れ下った千種川は、上月町で日名倉山に発して佐用町を流れる支流の一つである佐用川と合流し、その後は上郷町を経て赤穂市で播磨灘に流れ出ている。流域は2市8町にわたり、南北に細長い流域形状を呈している。

千種川流域の地質状況については、上流部は主として白亜紀の安山岩質からなる火山岩層・火山砕屑岩層と古第三紀の深成岩類で構成されている(地質調査所, 1992)。中流部には古生界の上層や氷上層が分布している。そして、下流部では白亜紀の流紋岩～安山岩質の火山岩層からなる相生層群が広く分布している。

この千種川は、兵庫県内では最も人工改変の少ない河川で、美しい自然景観と清澄の川の流れを残している。採水を行ったのは中流部の南光町の部分であるが、電気伝導度が $50 \mu\text{S}/\text{cm}$ 前後と溶存成分の少ない清冽な水である。そして、流域内、特に上・中流域には自然景観や自然環境を生かしたキャ



第8図 千種川的位置図



第9図 洞川湧水群

ンブ場やオリエンテーリング・フィッシングセンターなどの野外施設も設備されており、自然を満喫することができる。

ところで、千種川下流部に位置する赤穂市は、「忠臣蔵」あるいは「赤穂浪士」で有名な旧城下町である。この町には日本最古の上水の一つとされている「赤穂上水」が残っている。江戸時代初期の元和年間に完成されたもので、江戸の神田上水と福山の上水とともに「天下の三上水」と呼ばれていたものである。1944年に近代水道が導入されるまで利用されてきたというもので、その遺構は今も守り伝えられ、防火用水や打ち水用に使われている。

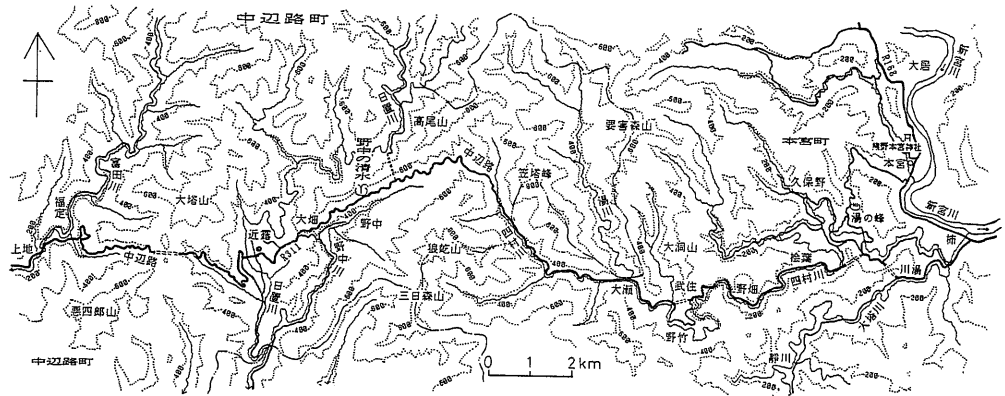
2.9 洞川湧水群

洞川湧水群は、奈良県の中央部、吉野郡天川村(てんがわ)洞川に位置している。この天川村は紀伊山地の中にあつて、太平洋に注ぐ新宮川(十津川)の最上流域に位置し、村の東側には古来より山岳信仰の山として知られる大峰山系の山々が南北に連なっている(第9図)。湧水のある洞川地区は、霊峰大峰山への登山口として知られている所でもある。この洞川へは、吉野川中流部に位置する下市町から国道309号線を南下し、黒滝村を経て約26 km 進むと天川村の中心地である川合に至るが、そこから天川・山上川沿いに7 km ほど遡ると到達する。

洞川地区の地質については、ジュラ紀およびそれ以前の山上ヶ岳層群からなり、緑色岩類・石灰岩・頁岩・チャートを中心とする(志井田ほか, 1989)。また、この地域は降水量の多い地域でもあり、石灰岩が侵食を受け、山の斜面や地下などに大小30ヶ所以上もの洞窟を作っている。大きな洞窟、つまり鍾乳洞としては、五代松鍾乳洞や面不動鍾乳洞などがある。そして、洞窟のほとんどには湧水が出ている。それらの中では、「泉の森」、「ゴロゴロ水」、「神泉洞」などの湧水が知られている。

泉の森は地区の鬼門に当たる北東部にあり、300年を超える御神木の奥にある小さな洞窟から清水が湧き出しており、「神の水」とも呼ばれている。ゴロゴロ水は、県の天然記念物に指定されている五代松鍾乳洞の近くにあつて、清冽な湧水が大きな岩の間から大量に流れだしている。流れ出すときの音が洞穴に反響するためか、「ゴロゴロ水」と昔から呼ばれてきたという。神泉洞は、やや大きな洞窟内を清水が流れているもので、神秘的な美しさがあることから「神の泉」として崇められてきた湧水である。また、洞川の集落内にある龍泉寺の境内にも清水が湧き出しており、小さな湧水池を作っている。これらの湧水は、水温が10~12℃とやや低く、水質組成はCa⁺⁺とHCO₃⁻成分を主体とする石灰岩地域に特有の性状を呈している。

この洞川の湧水群については、山深い所にあつて、それほど多くの人を訪れることもないため、荒らされることなく自然のままに近い状態にあり、こ



第10図 野中の清水

のままの状態が続いてほしいものである。

2.10 野中の清水

野中の清水は、和歌山県の西牟婁郡中辺路町野中にある清水である。この中辺路町は、紀伊半島の南西部、日置川の上流部の紀伊山地にあって、古来より熊野詣での人々が辿った熊野古道の“中辺路”の道が通っていた所としても知られている(第10図)。この中辺路の古道の傍らに湧き出ているのが「野中の清水」である。

熊野は、古くから「黄泉の国」・「死者の国」ともいわれ、異郷の地であり、人生に傷つき、絶望したとき、平安・鎌倉時代の人々は心に熊野を念じ、熊野三千六百峰の果てにある熊野三山(本宮・新宮・那智の三大社)を目指して、京の都から往復約1ヶ月の熊野詣での旅に出たという(講談社, 1993)。この熊野への道は、俗塵にまみれた過去の自分を死の国に葬り、新しく甦えろうとして迎える還魂蘇生の黄泉還りの道でもあった。熊野三山に詣るには、いくつかの街道があり、なかでも有名なのが和歌山県側の紀伊路と、三重県側からの伊勢路であるが、上皇や平安貴族たち、あるいは「蟻の熊野詣」といわれた庶民の参詣者たちは難路の紀伊路の方を好んで歩んだという。紀伊路の熊野古道には、点々と続く九十九王子という熊野三山遥拝所があって、これを辿って行くと自然に本宮大社へと行き着くことができる。田辺からの中辺路の古道は山の中を通過していたことが多く、現在、この場所に行くには国道311号線を進んで進むことになる。

野中の清水は、田辺市から約50 kmほどの紀伊山中の山腹部(標高約500 m)にあり、九十九王子の一つである継桜王子跡に建てられた若一王子権現社

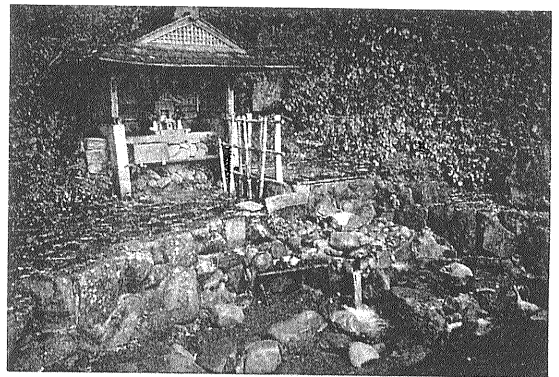
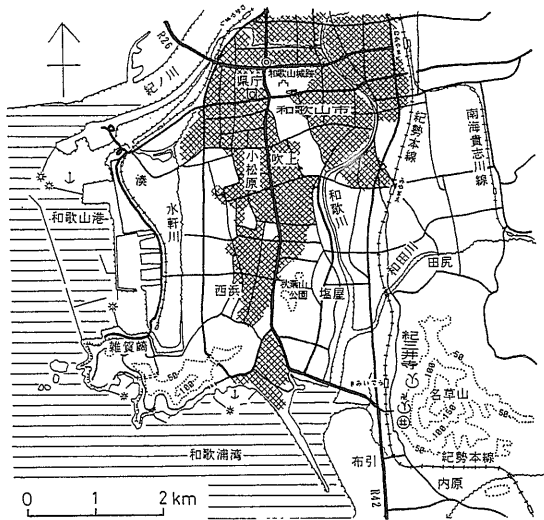


写真4 野中の清水

のそばにある。この社には樹齢約千年という杉の巨木群が茂り、県指定文化財の名木「野中の一方杉」として知られている。この杉の巨木群は、日差しとの関係からか、南の方角だけに長い枝を伸ばした不思議な杉で、かつての各王子社にあった古樹のうちで唯一伐採されずに残されたものという。清水はこの杉の古木群の茂る社の崖下にある。湧き出し口の部分には小さな小屋が掛けられてあり、水神様が祭られている(写真4)。この湧水は水温が15°Cほどで、pHは6.0と弱酸性であり、電気伝導度が82 $\mu\text{S}/\text{cm}$ と溶存成分の少ない水である。この野中地区は、山の中腹にあることから、水には余り恵まれていないが、この清水だけは日照りの時でも潤れることなく湧き出しており、古来より中辺路の古道を行き来した熊野詣での旅人たちの乾いた喉を潤してきた清水でもある。湧出量は日量100~200 m^3 程度と多くはないが、現在も付近の家々の飲用やその他の用水として使用されている。この野中の清水付近の地質は、古第三紀の四万十累帯のうちの音無川層群の羽



第11図 紀三井寺の三井水

六累層からなり、主として砂岩・泥岩の互層から構成されているが(鈴木ほか, 1979), 一部には礫岩・粗粒砂岩を伴っている(中沢ほか, 1987). 湧水は礫岩中の地下水が湧出してきているものと考えられる.

なお、熊野古道はさいわいにも国道から離れた山道が多く占めており、その険路のゆえに近代化の開発の波からはずれた所にあつて、今なお昔のたたずまいをとどめており、このままの自然環境の状態を以て欲しいものである.

2.11 紀三井寺の三井水

和歌山市南部の名草山の山麓に、西国二番礼所として知られる紀三井寺がある(第11図). この紀三井寺は、約1,200年前に唐の僧偽光上人により開山されたもので、寺の名は三つの井戸に因んだものとされている. 三つの井戸とは「清浄水」・「吉祥水」・「楊柳水」のことで、いずれも名草山(標高228 m)の西麓部にあり、名称は初代紀州藩主の徳川頼宣の命により、儒学者の李梅溪が名付けたものとされる. これら三井が名水百選に選ばれている.

清浄水は、参道の石段の途中の左側の井戸に湧く清水で、石で作られた水路を通して石段右側の水槽に溜められ、そして小さな滝となって流れ落ちている. 吉祥水は、清浄水から北へ約400 mほど行った民家の裏手のやや高い所から湧き出しているもので、石垣に積まれた途中の石樋から水が流れ落ちている(写真5). この吉祥水については、つい最近ま

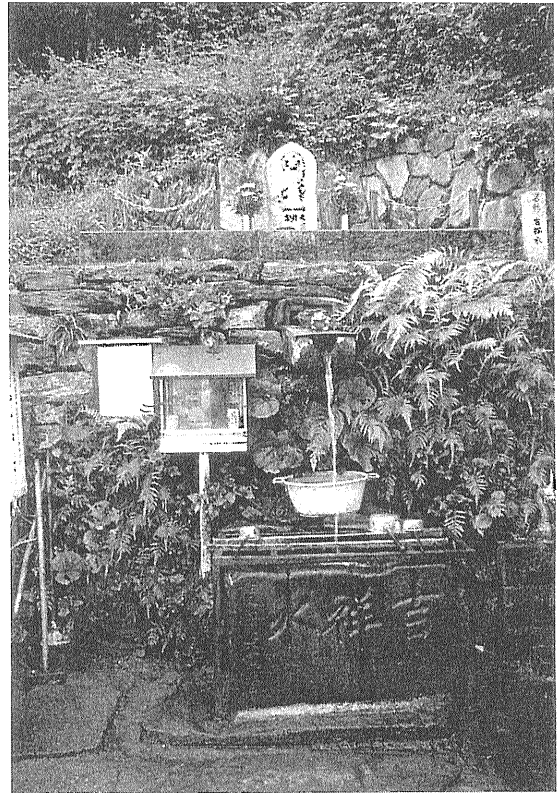


写真5 紀三井寺の吉祥水

では土砂に埋もれていたというが、復元・整備されて、再び清らかな水を湧き出させている. 楊柳水は、清浄水の南100 mほどに位置する井戸で、少し前までは草に埋もれてみる事ができないとされたが、訪れたときには大きな木製の屋根型をした蓋がしてあり、井戸が復元・整備されたようであった. これらの湧水は水量としてはわずかであるが、飲用のほか、華道や書道の水として使われ、また病を救う「幸福の水」とも呼ばれてきたという.

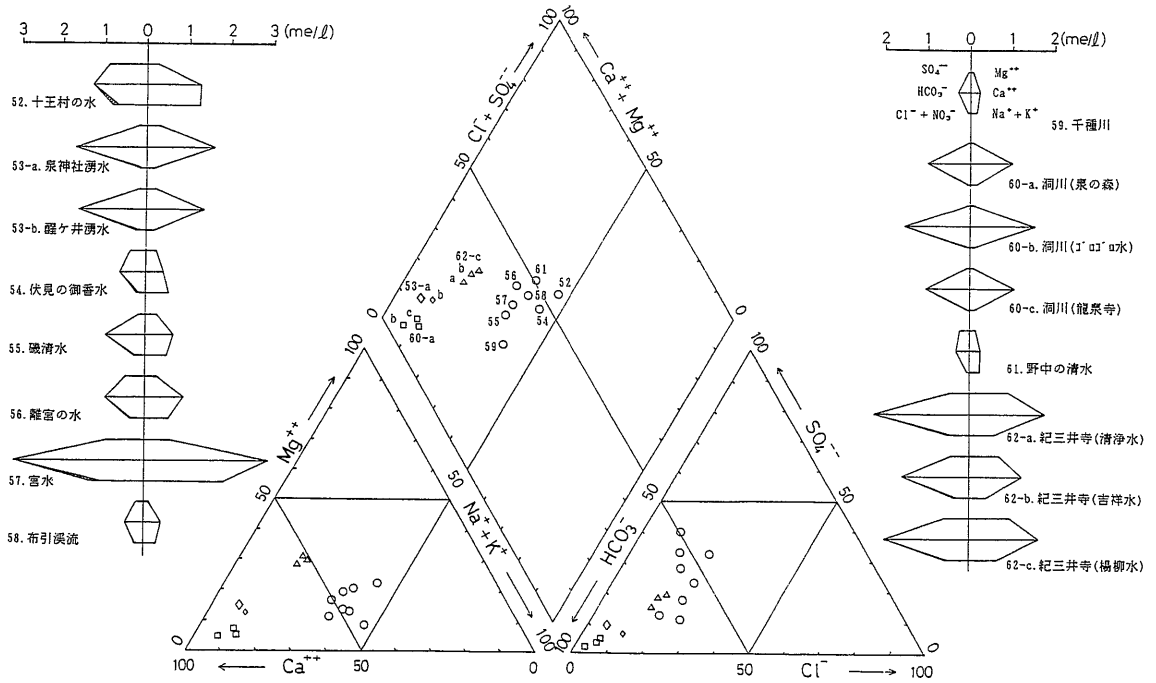
名草山の地質は、泥質片岩と砂質片岩を主体とし、塩基性片岩・珪質片岩・礫質片岩を挟む三波川帯の鞆淵層層から構成されている(中沢ほか, 1987). 三井水の水質をみると、いずれも中性~弱アルカリ性の水で、電気伝導度が250 $\mu\text{S}/\text{cm}$ を超えており、溶存成分の多い特異な水となっている.

この紀三井寺は、春ともなれば早咲きの桜の名所として知られている. そして、紀三井寺の門前がかつての熊野古道に面した所に位置しており、これら三井については昔から多くの旅人が喉を潤した所でもある.

第1表 近畿地域の名水等の水質分析結果

番号	名水の名称	所在地	水源	年月日	電導度 ($\mu\text{S}/\text{cm}$)	水温 ($^{\circ}\text{C}$)	pH	RpH	7%かり度 (mg/L)	Cl^- (mg/L)	SO_4^- (mg/L)	NO_3^- (mg/L)	Na^+ (mg/L)	K^+ (mg/L)	Ca^{++} (mg/L)	Mg^{++} (mg/L)	SiO_2 (mg/L)	計 (mg/L)
52	十王村の水	滋賀県彦根市	Sp	920727	284.0	15.2	6.6	6.9	63.0	21.8	42.9	10.2	28.3	1.0	25.2	2.8	11.0	206.2
53-a	泉神社湧水	滋賀県伊吹町	Sp	920727	212.0	13.5	7.4	7.4	83.0	3.6	8.6	2.9	3.6	0.9	33.0	3.7	8.8	148.1
-b	醒ヶ井湧水	滋賀県米原町	Sp	920727	195.0	13.4	7.2		79.0	7.9	5.9	3.8	4.7	0.0	27.8	2.7	8.0	139.8
54	伏見の御香水	京都府京都市	Gw	930827	135.0	19.0	6.4	6.8	30.0	5.6	17.9	3.2	11.5	2.4	8.5	3.4	51.3	133.8
55	磯清水	京都府宮津市	Gw	900928	170.0	19.5	6.2	6.8	46.5	13.1	7.9	1.2	10.6	2.2	13.6	3.5	15.6	114.2
56	離宮の水	大阪府島本町	Gw	930827	194.0	23.8	5.8	6.6	46.0	10.3	22.3	3.5	11.1	5.0	18.4	3.7	20.8	141.1
57	宮水	兵庫県西宮市	Gw	890912	530.0		6.8	7.0	155.4	40.3	43.1	14.1	34.9	15.1	58.1	7.3	29.5	397.8
58	布引溪流	兵庫県神戸市	R	930827	92.0	24.5	7.0		21.0	6.4	8.7	2.2	6.6	1.1	8.1	1.4	16.4	71.9
59	千種川	兵庫県南光町	R	900927	53.2	19.5	6.9		14.5	2.8	2.5	0.3	3.7	0.3	4.1	0.7	13.6	42.5
60-a	洞川-泉の森	奈良県天川村	Sp	890912	138.0	11.5	6.8	7.2	50.4	2.2	2.1	1.1	2.4	1.8	20.4	0.8	10.9	92.1
-b	洞川-「J」の「水」	奈良県天川村	Sp	890912	194.0	10.4	7.0	7.4	78.8	1.8	1.8	1.6	1.9	1.0	31.8	1.1	10.0	129.8
-c	洞川-竜泉寺	奈良県天川村	Sp	890912	147.0	11.4	7.0	7.4	51.5	2.3	2.5	1.9	2.2	1.4	21.1	1.1	8.9	92.9
61	野中の清水	和歌山県中辺路町	Sp	890913	82.5	15.4	6.0	6.8	15.8	2.4	12.3	0.4	4.8	1.1	5.4	1.6	14.9	58.7
62-a	紀三井寺(清浄水)	和歌山県和歌山市	Sp	890913	340.0	18.1	7.8	7.8	111.8	16.7	23.0	4.3	12.6	1.3	35.7	11.2	19.0	235.6
-b	紀三井寺(吉祥水)	和歌山県和歌山市	Sp	890913	250.0	16.4	7.0	7.4	76.1	11.9	20.9	2.8	9.8	1.1	24.7	9.0	19.1	175.4
-c	紀三井寺(楊柳水)	和歌山県和歌山市	Gw	890913	338.0	18.5	7.2	7.4	98.7	18.7	28.3	4.6	14.0	1.9	32.9	11.8	18.3	229.2

(水源: Sp=湧水, Gw=地下水, R=河川水)



第12図 水質の表示図(数字は名水番号)

3. 水文化学的特徴

これらの名水の水質の特徴に関して次に述べる。採水はそれぞれの名水によって異なるが、1~3回行った。先に述べた水温・電気伝導度(25 $^{\circ}\text{C}$ に換算)・pH等は現地において採水時に測定を行ったものである。また、アルカリ度(HCO_3^-)・ Cl^- ・ SO_4^- ・ NO_3^- ・ Na^+ ・ K^+ ・ Ca^{++} ・ Mg^{++} ・ SiO_2 などの主要溶存成分については、ポリビンに採水して持ち帰って分析を行った。その結果の一部を表したの

が第1表である。そして、このデータをもとにキーダイアグラムおよびヘキサダイアグラム表示で表したのが第12図である。

電気伝導度については、十王村の水・泉神社湧水・離宮の水・宮水および紀三井寺の三井水では200 $\mu\text{S}/\text{cm}$ を超えているが、千種川や野中の清水では100 $\mu\text{S}/\text{cm}$ 以下となっている。水温は10~24 $^{\circ}\text{C}$ と広範囲にわたり、洞川湧水群では11 $^{\circ}\text{C}$ 前後と低いが、離宮の水や磯清水などでは採水時の関係が高い。pHについて、泉神社湧水や醒ヶ井、および紀三井

寺の三井水は弱アルカリ性であり、洞川の湧水群や布引溪流・千種川はほぼ中性を示しているが、その他は弱酸性を示している。

名水の主要溶存成分量についてみると、第12図と第1表からも明らかのように、多いものと少ないものの二つに大別できる。溶存成分量の多いのは、十王村の水・泉神社湧水・醒ヶ井湧水・離宮の水・宮水・紀三井寺の三井水である。少ないのは、千種川・野中の清水・布引溪流・洞川湧水群である。なお、 SiO_2 成分を多く含有している伏見の御香水と磯清水はそれらの中間を示す。

水質組成について、十王村の水・御香水・布引溪流・野中の清水、および離宮の水は、キーダイヤグラムのほぼ中心部分にプロットされており、通常みられる水と比べると Na^+ や K^+ および Cl^- や SO_4 の割合が多いのが特徴であり、 Ca-HCO_3 型と Ca-SO_4 型の中間型を示している。そして、泉神社湧水・醒ヶ井湧水と洞川湧水群については、 Ca^{++} と HCO_3^- 成分の割合が高く、石灰岩地域特有の Ca-HCO_3 型の地下水の性質を呈している。紀三井寺の三井水については、 Ca^{++} と HCO_3^- 成分の他に、 Mg^{++} の割合も高く、また相対的に溶存成分量が多いこともあり、特異な水質組成を呈している。宮水については、溶存成分の量が非常に多いのが特徴で、 Ca^{++} と HCO_3^- 成分が非常に多い他に Na^+ ・ K^+ や Cl^- もかなり多く含まれており、かなりの硬水であって普通の地下水とは異なる特異な水である。磯清水と千種川については、 Ca^{++} と HCO_3^- 成分を主体とする Ca-HCO_3 型の水質を呈している。

SiO_2 濃度についてみると、伏見の御香水が45.8 mg/lと高い値であるが、その他は20 mg/l以下と低い。宮水については29.5 mg/lであり、他の成分値に比べれば低い値である。一般に、近畿地方については火山地域が分布していないこともあり、 SiO_2 濃度は低い傾向にある。次に、無機汚染の指標となっている NO_3^- 成分については、宮水で10 mg/lを超え、そして十王村の水でおおよそ10 mg/lの値を示しているが、その他は全般に低い値である。

4. おわりに

今回は近畿地方に位置する11ヶ所の名水百選を中心に述べてきた。この地域の名水百選は、数の上ではあまり多くはない。しかし、歴史の古い地域であることから、故事来歴や由来の残された名水・名井・名泉の数が多いのが特徴である。特に、古都・京都の市内には鴨川・桂川の伏流水が随所に湧出し、かつては多くの名水・名井・名泉があって、それらは茶道・書道の文化、あるいは食の文化などが発達した背景にもなっていた。しかしながら、明治以降の近代化の過程で消滅してしまった名水も多いのも事実であり、残された所については保全・保護を施してほしいものである。

ところで、この近畿地方には、酒どころとして全国的に有名な“灘”と“伏見”の2ヶ所がある。灘の水は硬水であるが、伏見の水は軟水であり、対照的な水であることから酒の質も異なる。これら二つの酒どころ地域の水がそれぞれ名水百選に選ばれたというのも何か不思議な因縁めいた感じがする。

文 献

- 地質調査所(1992): 100万分の1日本地質図, 第3版。
 藤田和夫・笠間太郎(1983): 5万分の1地質図幅「神戸」. 地質調査所。
 講談社(1993): 熊野詣. 135p。
 中沢圭二・市川浩一郎・市原 実(1987): 日本の地質6「近畿地方」. 共立出版, 297p。
 鶴巻道二・中屋真司(1992): 名水を訪ねて(4)大阪府島本町の「離宮の水」. 地下水学会誌, 34, 223-230。
 済川 要(1989): 名水を訪ねて(5)宮水. 地下水学会誌, 31, 57-62。
 志井田 功・諏訪兼位・梅田甲子郎・星野光雄(1989): 5万分の1地質図幅「山上ヶ岳」. 地質調査所。
 鈴木博之・原田哲朗・石上知良・公文富士夫・中尾志津男・坂本隆彦・立石雅昭・徳岡隆夫・井内美郎(1979): 5万分の1地質図幅「栗栖川」. 地質調査所。

SHIMANO Yasuo and NAGAI Shigeru (1994): Travels of Japanese valuable waters — (7) Kinki area.

(受付: 1994年1月11日)